

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003312">https://doi.org/10.15084/00003312</a>

# 依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造<sup>(注1)</sup>

日本語教育センター第一研究室 熊谷 智子

## 要旨:

言語行動をストラテジーの組合せとしてとらえる観点に立ち、国立国語研究所の調査による資料をもとに、ある依頼の場面に関する分析を行った。その結果、以下の所見が得られた。

- 主要ストラテジーは、〈依頼の表明〉〈事情の説明〉〈恐縮の表明〉である。
- 回答全体の約 3/4 が、2 個か 3 個のストラテジーから成っている。
- 典型的な組合せパターンは、〈(恐縮)－(説明)－依頼〉(カッコは省略可能の意味)であり、場合によって他のストラテジーが加えられる。
- 丁寧なことばづかいをする人の方がストラテジーを多く使う傾向がある。
- 同じカテゴリーに属するストラテジーでも、はたらきかけの姿勢によって、ことばづかいの丁寧さとの結びつき方は異なる。

**キーワード:** 言語行動、依頼、ストラテジー、丁寧さ

## 1. はじめに

依頼は、発話行為論や言語行動分析において従来から研究されているが(国語研 1984、井出他 1986、日本語学』14-11 など)、たとえば「窓ヲ閉メテ下サイ」などの端的な一文による実現として想定されることが多い。しかし、実際の場面で誰かに窓を閉めてもらう場合には、以下のような発話がなされることが多いのではないだろうか。

(1) 「すみませんけど、ちょっと寒イモンデ、窓ヲ閉メテモラエマスカ。」

この発話は、次のような3つの構成要素から成り立っている。

- (2) a. すみませんけど、 [恐縮の気持ちの表明]
- b. ちょっと寒イモンデ、 [理由の説明]
- c. 窓ヲ閉メテモラエマスカ。 [依頼の表出]

a、bの要素は、対人関係を調整したり、相手の理解を促すなど、依頼の遂行を支える役割を担っている。ここでは、(2)で示した a～c のような要素を、言語行動を効果的に達成するために話者が用いる方策として、ストラテジーと呼ぶことにする(注2)。そして、依頼の言語行動をストラテジーの組合せとして分析し、その機能的構造を探る。

## 2. 目的

ストラテジー、あるいは類似の概念を用いた言語行動や談話の研究は近年増えてきたが(Olshtain & Cohen 1983, Kumagai 1993, Kasper & Blum-Kulka (eds.) 1993, ザトラウスキー 1993 など)、ケーススタディの形をとる場合が多く、より一般的な知見の追求が今後の課題として残されている。

本研究では、言語行動意識に関する大量面接調査の資料に基づいて、依頼のストラテジーに関するより一般的な観察を得ることを目的とする。調査回答は、仮定された場面について、実際の会話なら相手とのやりとりの中で小分けして言うかもしれない内容をひとまとまりに述べており、自然談話資料とは性質を異にする。この種の資料の特徴は、むしろ、「この場面でこの目的を果たすためにはこれこれのことを言うのが適切かつ必要であろう」と話者が考えるところの行動モデルを引き出し得る点にある。それは、実際の相互作用の場で相手の出方や状況に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的な「行動遂行イメージ」とも言える。日本語の各種の言語行動について、こうした行動モデルのありようを明らかにすることは、社会言語学のみならず、対照研究や日本語教育への寄与という意味でも重要である。

本稿では、一つの依頼場面について、使用ストラテジーの種類、および典型的な展開パターンを明らかにするとともに、言語形式による待遇度とストラテジー使用の関係を探ることによって、言語行動における「丁寧さ」の一側面を考察する。

### 3. 方法

分析に用いるのは、国立国語研究所が1972年に愛知県岡崎市で行った面接調査(詳細は国語研 1983 参照)による資料である。計15の場面を簡単な絵と口頭説明で提示して、そこでなんと言うかを尋ねている。本稿でとりあげるのは、その中の設問103「荷物あずけ」と呼ばれる場面である。質問の文言、および回答例を示す。

(3)これはあなたの買いつけの店です。この店で買物をしましたが、ちょっとよそへ廻るので、このふるしき包をあずかっというてもらう場合、あなたは店のこの人に、何と言って頼みますか。

回答例：スイマセンケド、ヨソエ マワルカラ イチジ アズカッテ クダサイ

10～70代の男女400人(1名無回答のため、399人分)から得た回答の文字化資料を利用した。資料には、被調査者の性別、年齢、学歴に加え、敬語使用に基づくことばの丁寧度の3段階判定(注3)の情報が付与されている。

分析においては、冒頭の(2)に例示したように回答を発話機能の観点から単位分割し、ストラテジーを抽出して分類した。この分類に基づいて回答をストラテジーの組合せの形に置き換え、ストラテジーの種類、種類ごとの使用頻度、基本的な組合せのパターンを分析した。また、丁寧度の段階づけの情報をを用いて、敬語使用の選択とストラテジーの使用傾向との関係を調べた。

## 4. 分析結果

### 4.1. ストラテジーの種類

回答に出現したストラテジーは、以下の4カテゴリーのもとに11種類に分類された。A1、B1、D1の出現頻度が目立って高く、主要なストラテジーであることがわかる。それに続くものとして、C1がある。(カッコ内は、399件中の出現件数。)

- A. 依頼の直接的行動
- 1 依頼を述べる (398) 例. アズカットイテ クレマセンカ
  - 2 依頼の「仕上げ」の慣用句を述べる (16) オネガイ シマス
  - 3 依頼について相手の意向を確認する (3) ドーデスカ
- B. 依頼の正当化
- 1 事情を説明する (246) チョット ヨソエ マワリマスカラ
  - 2 依頼の理由を述べる (15) コレ チョット オモタイカラ
- C. 説得のための条件・材料提示
- 1 相手の負担を軽減する (55) ダイジナ モノ ハイッテ イマセンカラ
  - 2 所要時間を述べる (25) イチジカングライデ モドリマスカラ
  - 3 引取りに来ることを明言する (18) カエリニ トリニ ヨリマス
  - 4 客の立場であることに言及する (6) イマ ココデ カイモノ シタンデスケド
- D. 対人配慮・関係調整
- 1 恐縮の意を述べる (237) スミマセンガ / オジャマデショーガ
  - 2 相手に呼びかける (9) オジサン / ヤマシタサン

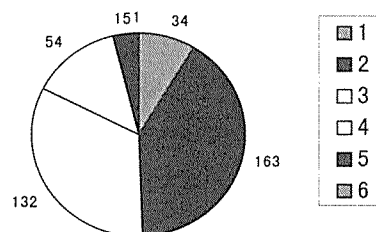
#### 4.2. ストラテジーの使用数

個々の回答に含まれていたストラテジーの数は、1～6個であった。使用数別の回答件数内訳を以下に示す。全回答の約3/4が、2個か3個のストラテジーから成っていた。

表1. 使用数別の内訳

使用数	件数
1	34
2	163
3	132
4	54
5	15
6	1
計	399

図1. ストラテジー使用数別の内訳



#### 4.3. 典型的な組合せパターン

ストラテジー使用数別に、件数の多かった組合せパターンを以下に示す。

使用数	典型パターン	割合
1	A1<依頼>	97.1% [33/34]
2	D1-A1<恐縮-依頼>、B1-A1<事情説明-依頼>	88.3% [73+71/163]
3	D1-B1-A1 <恐縮-事情説明-依頼>	56.1% [74/132]
	※D1- $\alpha$ -A1、B1- $\alpha$ -A1( $\alpha$ :別のストラテジー)	86.4% [86+28/132]
4	D1-B1-A1 のどこかに $\alpha$ が挿入・付加された形	55.6% [30/54]
5	D1-B1-A1 のどこかに $\alpha$ が挿入・付加された形	60.0% [9/15]

基本パターンは<(D1)-(B1)-A1>(カッコは省略可能の意味)で、場合によって別のストラテジーが挿入・付加されたり、主要ストラテジーのいずれかがくり返されたりして、依頼が構成されていた。

各ストラテジーを、今回分析した 399 件の回答における出現位置の大きな傾向によって配置すると、以下のような依頼発話の構造が得られる。

開始部	本 題 部	収束部
D 2 呼びかけ	D 1 恐縮 - B 1 事情説明 - A 1 依頼 ↑                    ↑                    ↑ C 2 所要時間    B 2 依頼理由    C 3 引取り C 1 負担軽減 C 2 所要時間 C 3 引取り	A 2 念押し A 3 意向確認

#### 4.4. ストラテジー使用とことばの丁寧度

ことばづかひの丁寧度別にストラテジー使用数の平均を求めた。丁寧な言語形式を用いたグループの方が、ストラテジーの使用数が多い。ストラテジー使用数別の丁寧度平均でも、使用数が多いグループほど丁寧な言語形式を用いる傾向がみられた。このことから、ストラテジーの使用数(一言で依頼をすませるか、いろいろなことを言うか)も、ことばづかひの選択と同様に、言語行動の丁寧さの一つの指標になり得ることが示唆される。

表 2. 丁寧度別の使用数平均

丁寧度	件数	使用数平均
1	138	2.891
2	217	2.581
3	44	2.136
計	399	2.639

図 2. 丁寧度別の使用数平均

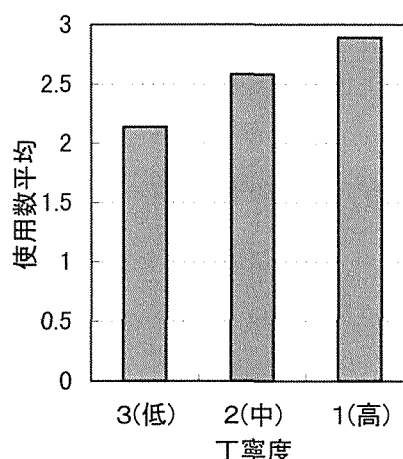


表 3. 使用数別の丁寧度平均

使用数	件数	丁寧度平均
1	34	2.000
2	163	1.902
3	132	1.636
4	54	1.611
5	15	1.400
計	399	1.764

※使用数 6 は 1 人のため、省略。

#### 4.5. ストラテジーの種類と言葉の丁寧度

ことばづかひの選択とストラテジー使用の関係を探るために、ストラテジーの種類ごとに、それを使用している回答の丁寧度の平均を求めた。平均が高い(丁寧な)順に並べると、以下ようになる。

D1 恐縮の意を述べる (237)	<1.603>	
A2 依頼の「仕上げ」の慣用句 (16)	<1.688>	
B1 事情を説明する (246)	<1.703>	
C3 引取りに来ることを明言する (18)	<1.722>	
C1 相手の負担を軽減する (55)	<1.727>	
A1 依頼を述べる (398)	<1.764>	←【丁寧度の全体平均】
C2 所要時間を述べる (25)	<1.920>	
B2 依頼の理由を述べる (15)	<2.067>	
D2 相手に呼びかける (9)	<2.111>	

B、C、Dなど、同じカテゴリーに属するストラテジーでも、丁寧なことばづかひと結びつきやすいものと、そうでないものがある。わきまへの姿勢の度合い、negative politeness か positive politeness か (Brown & Levinson 1987)、述べる内容の具体性の度合いなど、ストラテジーによって違いがあり、それが影響を及ぼす可能性が考えられる。

#### 5. まとめ

分析から、「荷物あずけ」場面の依頼に関して以下のことがわかった。

- 主要ストラテジーは、<依頼の表明><事情の説明><恐縮の表明>である。
- 回答全体の約 3/4 が、2 個か 3 個のストラテジーから成っている。
- 典型的な組合せパターンは、<(恐縮)–(説明)–依頼>(カッコは省略可能の意味)であり、場合によってそれに他のストラテジーが加えられる。
- 丁寧なことばづかひをする人の方がストラテジーを多く使う傾向がある。
- 同じカテゴリーに属するストラテジーでも、わきまや相手へのはたらきかけの姿勢の違いなどによって、ことばづかひの丁寧さとの結びつき方は異なる。

主要ストラテジーの組合せによる典型的パターンの存在、ことばの丁寧さとストラテジー使用数の相関については、他の依頼場面についての予備的分析でも同様の結果が得られている(熊谷 1995)。

今後は、発話機能より細かい表現レベル、たとえば断定の回避や言いさしによるやわらげのストラテジーなども考察するとともに、さらに他の場面についても分析し、場面間の比較もふまえて、状況や話者の属性などによるストラテジー使用の違い、行動の丁寧さにおけるストラテジーの関与などについて、考察を深める予定である。

[注]

1. 本稿は、筆者が平成10年度から3年計画で開始した研究の初期段階における報告である。
2. ストラテジーには、韻律などのパラ言語的なもの、動作などの非言語的なものもあるが、ここでは言語表現によるものに対象をしぼる。
3. 丁寧度の判定は、主に文末形式(大まかにまとめれば、ゴザイマス調/デス・マス調/ダ調の区別など)によって行われた。詳しくは、国語研1983(p.62)を参照。

【参考文献】

- 井出 祥子、荻野 綱男、川崎 晶子、生田 少子 1986 『日本人とアメリカ人の敬語行動』  
南雲堂
- 熊谷 智子 1995 「依頼の仕方 一国研岡崎調査のデータから」 『日本語学』 14-11,  
pp.22-32.
- 国立国語研究所 1957 『敬語と敬語意識』 秀英出版
- 国立国語研究所 1983 『敬語と敬語意識 一岡崎における20年前との比較』 三省堂
- 国立国語研究所 1984 『言語行動における日独比較』 三省堂
- ザトラウスキー、ポリー 1993 『日本語の談話の構造分析 一勧誘のストラテジーの考察一』  
くろしお出版
- 『日本語学』 1994 <特集 依頼表現> 14-11.
- BROWN, Penelope and Stephen C.LEVINSON 1987 *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge U.P.
- KASPER, Gabriele and Shoshona BLUM-KULKA (eds.) 1993 *Interlanguage Pragmatics*.  
NY: Oxford U.P.
- KUMAGAI, Tomoko 1993 Remedial Interactions as Face-Management: The Case of Japanese and Americans. 湯本、桜井、馬場編 『松田徳一郎教授還暦記念論文集』  
pp.278-300. 研究社.
- OLSHTAIN, Elite and Andrew D.COHEN 1983 Apology: A Speech-Act Set. Wolfson, N. and E.Judd (eds.) *Sociolinguistics and Language Acquisition*. pp.18-35. Rowley, MA: Newbury House.